

## 観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察

### (6) 九州 —藤井務旧蔵資料を中心にして—

#### **A Study of Sightseeing Areas in the Early Days of the Showa Era Through an Analysis of Tourism Pamphlets (6)Kyushu —Focusing on the former collections of Tutomu Fujii—**

谷沢 明

TANIZAWA Akira

#### **Abstract**

This paper discusses a tourism culture study aimed at exploring sightseeing spots and the style of sightseeing in the early days of the Showa era. This paper focuses on the Kyushu Region, and includes an analysis of the tourism culture of the region through tourism pamphlets. The main subjects are Unzen, Aso and Kirishima National Parks, and the Yabakei, Hita and Karatsu scenic areas. Since 1912, there has been an increase in foreign travelers being attracted to Japan as a travel destination. In 1930, the International Tourism Bureau was established to focus on attracting foreign guests to Japan. The influence of the national policy of attracting foreign tourists is shown in tourism pamphlets of Unzen and Aso around 1935. The root cause being the the existence of the "International Touring Route" (Shanghai ~ Nagasaki ~ Unzen ~ Aso ~ Beppu ~ Seto Inland Sea ~ Hanshin) from Shanghai through Three National Parks to Hanshin. In the scenic Yabakei, Hita and Karatsu areas, exploration of the region became easier due to development of roads and other access routes. As a result, sightseeing trips to enjoy the natural scenery became popular. As a result, natural landscape plans are featured in the tourism pamphlets.

#### **はじめに**

本稿は、昭和初期における観光地の状況、観光の在り方を探ることを目的とする観光文化研究であり、「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察」(1)～(5)<sup>1</sup>に引き続いて執筆するものである。主資料とするのは、藤井務氏(大正5年<1916>～平成15年<2003>)<sup>2</sup>の旧蔵コレクションである昭和初期に発行された観光パンフレット類である。本稿に掲載する資料は、長女である安藤典子氏(月刊誌『旅』元副編集長)から著者が譲り受けたもののの中の一部である。

これらの観光パンフレット類は、昭和初期の観光文化を知るうえで、旅行案内書『鉄道旅行案内』、『日本案内記』、『旅程と費用概算』等の補完資料としてその存在は無視できない。前稿

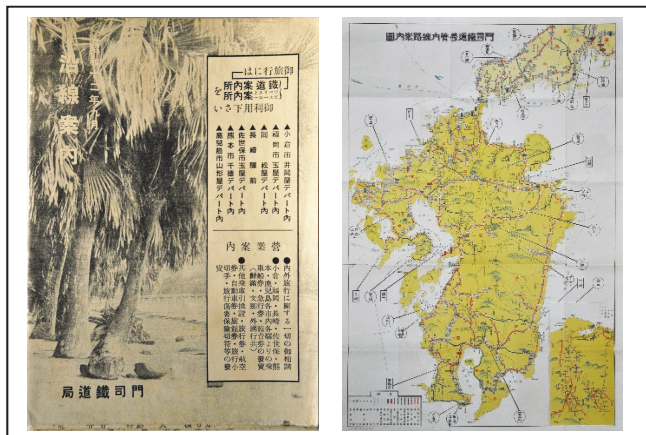
では、我が国有数の観光地である日光・箱根、富士・伊豆をはじめ、東京近郊の行楽・遊覧地、信越地方のスキー地、瀬戸内海の景勝地を事例研究で取り上げ、観光パンフレットの解説を通して昭和初期の観光地の状況、旅客誘致の在り方、世相等についての考察を行った。これに引き続き本稿では、九州の観光地に焦点を当てる。

## 1.九州の主要観光地

### (1)「沿線案内」(門司鉄道局、昭和12年)

門司鉄道局発行(昭和12年9月)の「沿線案内」〈資料1〉は、昭和初期の九州の観光地を概観するのに簡便なパンフレットである。54×38 cmの用紙を十五折りにした携帯サイズで、一面は「門司鉄道局管内案内図」、その裏面は沿線案内の解説文である。本パンフレットが発行されたのは、日中事変勃発2か月後に当たる。その後、観光旅行は、いわゆる「国策旅行」へと変容を余儀なくされる。それに伴い、観光パンフレット類も時局を反映した内容となるが、本パンフレットは、未だそのような表現は見られない。内容からして、大正期から昭和初期にかけて流行した観光旅行ブームの終焉期のパンフレットである、と捉えてさしつかえないであろう。

〈資料1〉「沿線案内」(門司鉄道局、昭和12年)



門司鉄道局管内案内図には、省線、同自動車線、連帯鉄道会社線、非連帯鉄道会社線、電車線、駅がことごとく記載され、未完の路線まで書き込まれている。連帯鉄道会社とは、省線と連絡運輸を行う契約を締結し、利用客の便宜を図る連帯切符を発売する鉄道会社である。本パンフレットの特徴は、九州全県の主要観光地15か所が丸印で記入されていることである。また、九州全県の沿線案内の

解説文128件(鹿児島線58、長崎線15、久大線11、豊肥線20、日豊線24)が掲載されている。なお、地図及び解説文には、旅行者の便を図ってか、かつて同局管内であった広島鉄道局(昭和10年新設)線の一部も掲載されている。

案内図に丸印が記入された九州の主要観光地15か所、その沿線案内解説文の要点を整理したものが、〈表1〉である。なお、門司鉄道局管内案内図と類似した主要観光地に丸印をつけた地図が、『旅程と費用概算』(昭和5年版)<sup>3)</sup>に掲載されている。ただし、『旅程と費用概算』掲載地図には、〈表1〉に示した九州の主要観光地15か所に加えて別府温泉に丸印がつく。門司鉄道局管内案内図において別府温泉は、主要都市としてマークされている。したがって上記15か所に別府温泉を加えたものが、昭和初期の九州における主要観光地として捉えられていた、とみ

てさしつかえないであろう。

〈表 1〉門司鉄道局管内案内図にみる九州の主要観光地 15 か所 (昭和 12 年)

県名	主要観光地
福岡	英彦山: 海拔一二〇〇米、(中略) 昔は修験道者の行場で、山中大衆三千の坊舎があったといはれてゐる。頂上には、官幣中社英彦山神社がある。
佐賀	唐津市: もと小笠原氏六万石の城下で、今人口三万一千、地は風光明媚な海水浴場として知られ、(中略) 又付近に名勝史跡が多い。 嬉野温泉: 武雄駅から十三軒、自動車三十五分。
長崎	雲仙嶽: 国立公園、春はつつじ、秋は紅葉、冬は霧氷の美を誇る。又海山の眺めに富む小浜温泉、暑熱を知らぬ雲仙温泉をもつ。(中略) 観光地に保健郷を兼ねた一大勝区である。
熊本	阿蘇山: 海拔一五九二米、国立公園、世界有数の活火山、(中略) その火口原を取巻く外輪山の形勢雄大、世界に其の比を見ない。 球磨川下り: 人吉から白石まで二十四軒を舟は約三時間で下る。
大分	耶馬溪: 山国川の流域約六十軒に亘る溪谷の総称で旧、深、裏の三大溪から成つてゐる。 水郷日田: 幕政時代には、九州政治の中心点として、又文化と文教の中枢地として、江戸、長崎との交通頻繁であつたところである。 久住山: 海拔一七八七米九、九州本島第一の高峰、山麓に久住、飯田の二大高原あり、
宮崎	高千穂町: 天孫降臨の伝説地にして、高千穂峡は内務大臣指定の名勝。 青島: 内務大臣指定の天然記念物、また島中の青島神社は彦火々出見命と豊玉姫命を祀る。
鹿児島	霧島山: (高千穂峰海拔一五七四米、国立公園) 普通霧島登山とはこの峰に登るをいふ。山頂には天孫降臨の遺跡といふ『天の逆鉾』がある。 指宿温泉: 湧泉の豊富、地域の拡大なること、九州に於ては別府に次ぐ大温泉郷である。 池田湖: (案内解説文の記載なし) 荒崎の鶴: 内務大臣指定の天然記念物、渡来期毎年十月中旬から翌年三月上旬まで。

## (2)九州の遊覧旅行

大正から昭和初期にかけて、九州の遊覧旅行はどのように行われていたのであろうか。その姿を知るには、『旅程と費用概算』<sup>4</sup>掲載の九州遊覧旅行の旅程が参考になる。その題名を時系列に例示すると、〈表 2〉の通りである。

〈表 2〉から、阿蘇、別府、雲仙、霧島、耶馬溪、日田、唐津、球磨川、嬉野などが大正期から昭和初期にかけての遊覧旅行の主要訪問先になっていたことがわかる。門司鉄道局管内案内図にみる九州の主要観光地 15 か所のうち、〈表 2〉の遊覧旅行の訪問先に現れないものがいくつかある。英彦山、久住山、指宿温泉、池田湖、野田郷荒崎の鶴である。英彦山と久住山は山

岳であり、回遊型の遊覧旅行から除いたのであろうか。指宿温泉と池田湖は、昭和9年の指宿駅開業以降に観光地として発展した所である。渡り鳥である鶴は、季節的なもののゆえ除外した、と考えられる。また、青島は昭和期になって九州一周の旅先に加わる。日豊本線全通（大正12年）による経路変更の影響であろうか。「沿線案内」〈資料1〉と『旅程と費用概算』の検討から、戦前に国立公園に指定された山岳地帯の雲仙・霧島・阿蘇をはじめ、卓越した景観を誇る耶馬溪・日田・唐津、川遊びが楽しめる球磨川、温泉地として名高い別府・嬉野が大正から昭和初期の九州における遊覧旅行先として好まれた観光地であったことが浮かび上がってくる。

以下、九州の代表的観光地として知られる雲仙、阿蘇、霧島、耶馬溪、日田、唐津を取り上げてみたい。

〈表2〉『旅程と費用概算』掲載の九州遊覧旅行の題名一覧

発行	九州遊覧旅行の題名
大正9年版	長崎日田耶馬溪廻遊（七日）、長崎阿蘇別府廻遊（七日）、 長崎・熊本・阿蘇・日田・耶馬溪・別府（七日）、長崎・温泉・熊本・阿蘇・別府行 （九日）、長崎・鹿児島・霧島・玖摩川・唐津廻遊（七日）
大正15年版	別府・耶馬溪遊覧（東京から七日）、長崎一二日市（日帰り）、長崎—彼杵—嬉野—武雄 廻遊（日帰り）、温泉遊覧（長崎ヨリ二日）、長崎—日田—耶馬溪廻遊（六日）、 長崎—阿蘇—別府廻遊（五日）、長崎・鹿児島・霧島・玖摩川・唐津廻遊（七日）、 長崎・温泉・熊本・阿蘇・別府廻遊（九日）、九州一周旅程（十一日）
昭和5年版	長崎一二日市遊覧（長崎から日帰り）、長崎—嬉野・武雄温泉巡り（長崎から日帰り）、 雲仙遊覧（長崎から二日旅程）、長崎—阿蘇—別府廻遊（長崎から五日）、 天草遊覧と雲仙廻遊（長崎から四日）、九州一周旅程（門司基点十日）、 別府・耶馬溪・雲仙・阿蘇廻遊（遊覧券利用東京から二週間）

\* 「温泉」とは「雲仙」、「玖摩川」とは「球磨川」のこと。「二日市遊覧」は大宰府神社参詣を意味する。

## 2. 国立公園、雲仙・阿蘇・霧島

### (1) 雲仙・阿蘇・霧島への旅

古来、湯治のために利用されていた雲仙は、明治期に入ると長崎滞在の外国人避暑客が訪れる地となった。雲仙が観光地として発達するのは、明治44年、我が国初の県営公園である雲仙公園が開設されたことを契機とする。大正2年、県営ゴルフ場や県営テニスコートも設置された。また、大正5年、千々石～雲仙間の自動車道路が完成し、大正11年、小浜～雲仙間に定期乗合自動車が行運を開始した。さらに、同年、島原～雲仙間にも自動車道が完成した。昭和2年、雲仙岳は「日本新八景」山岳部門第一位に選ばれ、その名をほしいままにする。また、翌3年に雲仙岳は名勝に指定され、昭和9年には我が国初の雲仙国立公園が誕生したのである。

大正中期の雲仙への旅を、『鉄道旅行案内』（大正7年）<sup>5</sup>から紹介する。起点は長崎である。

「長崎よりは陸路茂木に至り、汽船にて小浜に至る、小浜より温泉まで三里馬車の便がある、諫早よりは島原鉄道に頼り愛野駅下車小浜まで自動車、馬車、人力車の便あり、其途中千々岩（ママ）よりは温泉へ馬車の便あり、小浜經由より約三里を短縮するを得」

長崎から雲仙へ至るには、海・陸両路があった。海路では、長崎半島東岸の茂木港から島原半島西岸の小浜港まで船便を利用し、小浜から馬車で雲仙に至った。また、陸路では諫早駅から島原鉄道に乗換えて愛野駅まで行き、千々石あるいは小浜から雲仙を目指した。千々石から木場を経て雲仙に向かうのが近道であった。同書の記述を続ける。

「夏期浴遊の客遠く上海、香港より来る、山は先年長崎県営公園に定められてより、多額の資を投じて、道路の改修、娯楽機関の設備に努められたれば、老幼婦女も亦容易に登山し得る様になった。近年世界的の避暑地として世に知らるるに至った」

この記述によると、夏季の雲仙には、上海・香港からの外国人旅行客が多かったことがわかる。また、県営公園開設後、道路改修や娯楽施設の整備により、避暑地として有名になった旨が記されており、明治後期から大正初期にかけて雲仙が観光地化したことを知ることができる。

世界有数の活火山として知られる阿蘇は、古来、信仰と修行の霊場であった。明治期に入ると、登山や調査研究で阿蘇を訪れる人が現れた。阿蘇を訪れる観光客が飛躍的に増えたのは、大正7年に熊本～宮地間を結ぶ宮地軽便鉄道が開通したことによる。大正10年代に入ると、阿蘇を国立公園に指定しようとする動きが活発になった。大正11年、阿蘇を訪れた徳富蘇峰が、それまで「遠見鼻」と呼ばれていた外輪山にある阿蘇五岳の展望地を「大観峰」と名づけたことは、阿蘇が観光地として有名になりつつある時代を象徴する出来事、と捉えてよいであろう。昭和6年、坊中駅（現阿蘇駅）から米塚、草千里を経て阿蘇山上に至る自動車道が完成し、翌7年、乗合自動車の運行が始まった。以来、阿蘇山は多くの観光客を集めるようになり、昭和9年、阿蘇国立公園が第二次指定として誕生した。

宮地軽便鉄道開通時の阿蘇への旅を、再び『鉄道旅行案内』（大正7年）<sup>6</sup>から紹介する。先ず、坊中駅の記載を示す。

「阿蘇登山は此駅より最近し、噴火口まで南約二里、登路平易二時間半にて山上に達す、案内者賃金六十銭」

一般に「阿蘇登山」と呼ばれるものは、中岳西側にある阿蘇噴火口を見て引き返すことを指し、中岳や高岳に登頂するものではない。坊中駅からの道は登り易いことが記されている。注目されるのは登山案内者賃金の記載である。自動車道完成以前の旅行案内書には、おおむね登山案内料の記載が見られるため、案内人を雇っての阿蘇登山が一般的であったことがわかる。

<sup>7</sup>坊中駅からの記述は簡略であるのに対し、同書の立野駅からの記述は詳しい。

「戸下温泉又は栃木温泉に一宿し、翌日登山するがよい。立野より戸下まで十八町、馬車賃十銭、栃木まで一里、馬車賃十五銭である、（中略）ここより噴火口まで登り三里、道が峻しい。登道、地獄滝及湯の谷の噴湯が見られる、半途より上は全く草木を見ず、鞋底踏む処、焦石と爛沙ばかりである」



宮地軽便鉄道開通以前の阿蘇登山は、前夜、阿蘇山西麓の戸下・栃木温泉に一泊して噴火口を目指す人が少なくなかった。麓の温泉地から噴火口まで三里の道を往く。途中、地獄谷や湯の谷の噴湯を見物しつつ登ると、一木一草もない砂地となる。同書には、戸下・栃木温泉から登るものは宮地に下り、宮地から登るものは戸下・栃木方面に下るのが良い、と推奨している。徒歩での阿蘇登山は、往復約6時間半を要した。

ところが、坊中駅から山頂に向かう自動車道が完成し、乗合自動車が運行し始めると、阿蘇登山は、まことに手軽なものになった。『日本案内記九州篇』（昭和10年）<sup>8</sup>には、その様子が次の様に記されている。

「坊中駅から省線連絡のバスが噴火口下の本堂まで一五軒の間通じて居り、約五十分で美しい裾野を迂廻し乍ら展望を楽しみつつ登って仕舞ふので、阿蘇登山者の約九割はこのコースに依って居る」

乗客は、阿蘇の裾野の展望を楽しみつつ、わずか50分で登ってしまうのである。登山路は数口あるが最も便利なのは坊中駅である、とも記す。同書の記述を続ける。

「交通の至便は全くこの坊中登山口に登山者を集中して仕舞った。自動車路の開通後登山者は激増して以前は一年数万人に過ぎなかったが、近年は二十万人に達すると云ふ」

阿蘇の登山客は、この乗合自動車の運行開始により坊中登山口に集中するとともに、その数が激増したことがわかる。山上へ向かう乗物ができると、阿蘇山北麓では阿蘇神社が鎮座する宮地口に代わって、坊中口が表登山口になったことを知ることができる。

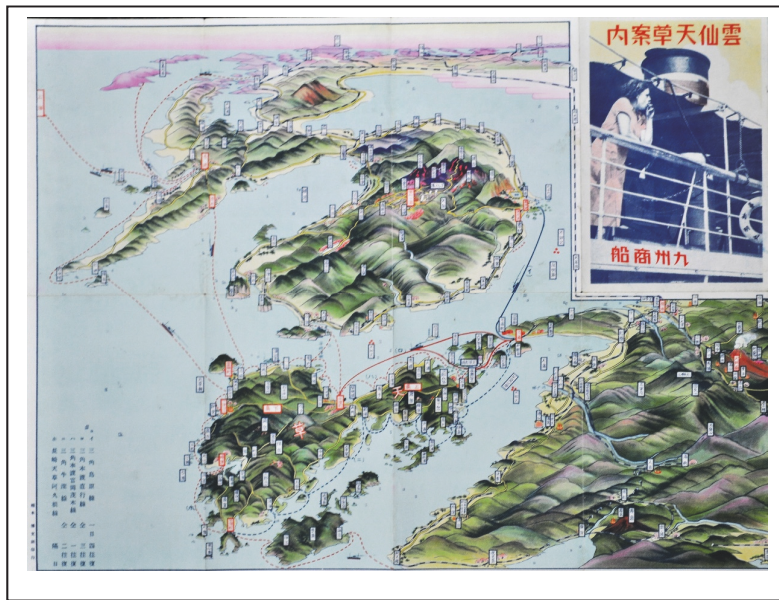
霧島は、韓国岳と高千穂峰を主峰とする霧島火山群と、韓国岳南西麓に点在する霧島温泉郷で知られる地である。霧島温泉郷は、江戸中期以降泉源の発見が相次ぎ、近在の農民の湯治場、また幕末には藩主の避暑地としても利用された。高千穂峰は、天孫降臨神話ゆかりの地として知られる。これらの地への交通の便は良くなく、大正期の旅行案内書<sup>9</sup>には、鹿児島本線旧国分駅（明治34年開業、現隼人駅）より馬車で霧島神社へ行き、高千穂峰の登山をして霧島温泉郷の栄ノ尾湯に一泊。翌朝、徒歩で大浪池を探勝し、韓国嶽まで行き、霧島温泉に引き返し、自動車で牧園駅（明治42年に旅客業務取扱開始、現霧島温泉駅）に出る旅程が紹介されている。霧島神宮から高千穂峰まで二里、高千穂峰から栄ノ尾まで三里の道程であった。なお、韓国岳の麓に開けるえびの高原の開発は、昭和27年の県道開通以降のことである。そして、霧島が観光地化されるのは、昭和30年代の北霧島有料道路、霧島スカイライン開通を契機とする。

## （2）「雲仙天草案内」（九州商船、昭和9年頃）

九州商船株式会社三角出張所が発行した「雲仙天草案内」〈資料2〉は、国立公園雲仙および景勝地天草の案内パンフレットである。十二折り15.5×10.5cmのパンフレット表紙は、有明丸のデッキにたたずむ女性の彩色写真、裏面に雲仙・天草を中心とした鳥瞰図を載せて航路を記す。発行年は明記されていないが、鳥瞰図に「昭和九年十一月廿六日長崎要塞司令部検閲済」と記されているため、昭和9年頃のものと考えられる。<sup>10</sup>

裏面には、雲仙・天草の案内のほか、天草遊覧コース、汽車・自動車・船舶の距離・所要時間・運賃案内、旅館案内が示されている。また、写真 16 枚を掲載する。うち 4 枚は九州商船関係のもので、三角港全景・九州商船三角出張所・三角島原連絡船有明丸・島原港栈橋である。雲仙の写真は 4 枚あり、雲仙全景（温泉）・ツツジ・雲仙ゴルフ場・キャンプである。ほかの 8 枚は天草のものである。

〈資料 2〉「雲仙天草案内」（九州商船、昭和 9 年頃）



鳥瞰図には、三角島原線（一日四往復）をはじめ五つの航路<sup>11</sup>及び鉄道、自動車道などが描かれている。島原半島東岸を往く鉄道は、諫早駅から島原湊<sup>12</sup>を経て島原湾沿いを加津佐<sup>13</sup>に延びる島原鉄道である。もう一つは、愛野村から分岐して、千々石<sup>14</sup>を経て橘湾沿いを小浜<sup>15</sup>の手前まで延びる雲仙鉄道（昭和 13 年廃止）で

ある。雲仙公園に登る自動車道は、小浜、島原湊、加津佐からの三ルートが示され、小浜、島原湊からの道には雲仙を目指すボンネットバスが描かれている。大正期に近道として利用されていた千々石から木場を経て雲仙に至る道は、この絵図の中に見られない。

航路に目を転じると、明治期から昭和初期にかけて利用されていた、長崎半島茂木港から小浜港に至る航路は描かれていない。茂木～小浜間航路は、昭和 6 年に廃止されたのである。陸上交通の発達がこの航路の利用者を減少させ、廃止に追いやったのであろう。熊本から三角を経て島原湊へ通じる航路（一日四往復）が雲仙への主要航路になっていることがわかる。

鳥瞰図には、熊本から阿蘇山を経て大分に至り、大分・別府から京阪神に到達する瀬戸内海航路が描かれている。また、目を長崎に転じれば、長崎からの航路が上海に繋がっている。すなわち、上海～長崎～雲仙～阿蘇～別府～瀬戸内海～阪神を結ぶルートが鳥瞰図から想起されるのである。

鳥瞰図には、島原半島中央部に普賢岳・国見岳・妙見岳の三峰、野岳・九千部岳・矢岳・高岩山・絹笠山の五岳、島原の街の背後に眉山が描かれている。また雲仙の三峰五岳に囲まれて噴気をあげる温泉地、白雲池、ゴルフ場があり、一帯は「雲仙公園」と記されている。案内文を見よう。まず、雲仙国立公園の概要である。

「雲仙岳は普賢妙見国見野岳矢岳の秀麗なる諸峰より成り絹笠高岳又美しく是に連なる而して普賢を初め諸山総て眺望絶佳（中略）雲仙の大自然に恵まれたると共に諸般の公園施設は休養に慰安に保健に観光に完備せられ名実共に理想的の遊覧地たり殊に夏は涼風全山に満ちて島原半島一円の風光地と共に避暑地として其名内外人に遍く熟知せらる」

雲仙の山々は眺望が優れており、東に阿蘇山の噴煙を望むとともに、祖母山・市房山・霧島の連山が俯瞰できる。また、鏡のような有明海に白帆の船が点々と浮かぶ。さらに、南東に天草諸島が、西に長崎の連山を隔てて大村湾などが見える。四方ことごとく海洋美、山岳美である、とも記す。また雲仙は、諸施設が整っていて理想的な遊覧地であり、避暑地として内外の人に広く知られている、とその特徴を述べる。次いで、雲仙公園の沿革である。

「明治維新後は僅かに島原地方人士や巡礼者の登山あるに過ぎざりしも、一方内地在留の外人連に憧憬され相当の登山者あり、日露戦争後は遠くハルピン、浦塩等より露人の来遊するあり、対岸支那よりの外人避暑客亦多く、（中略）ホテル続々と開業し、長崎県は外客誘致に資し延ては県の繁栄の為に、明治四十四年四月県会の協賛を経て遂に最初の県営公園の産声を挙げたり」

雲仙は、古くは行基菩薩が大乗院満明寺を開き、その後「温泉山一千寺」と称すほどの繁栄をみたが、やがて堂塔は灰燼に帰し衰微した。それが、明治に入ると外国人登山者や避暑客が訪れるようになり、長崎県も外国人客誘致に力を入れ、県営雲仙公園が開園（明治44年）したのである。とくに明治後期、ハルピンやウラジオストックからロシア人が来るとともに、東シナ海を隔てた中国から来訪する外国人避暑客が多くなったことが雲仙が賑わいを増した背景である、と述べる。記述を続ける。

「爾来県に於ては今日迄約一百万円の経費を投じて登山自動車道路を初め、他の交通施設、娯楽保健、衛生施設等諸般の公園施設の完備に務めし結果、昭和二年日本八景の第一位に推され、果然登山客は一躍激増するに至り、今日上海、香港方面より避暑来遊する欧米人は二十数ヶ国に亘るの盛況を示し、内地人登山客は関西方面を初め殆んど全国に亘るの広範囲を示す」

長崎県では、登山道路の整備はもとより、娯楽・保健・衛生の諸施設整備に力を入れた。そして昭和2年、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催、鉄道省後援による「日本新八景」コンテストにおいて雲仙岳は山岳の部第一位を獲得する。そのことにより登山者が激増し、二十数ヶ国から欧米人が避暑に訪れるばかりか、関西方面をはじめ全国から登山客が訪れるようになった、と記されている。さらに記述を続ける。

「今や国立公園として第一次の指定を受け、国民保健に、娯楽に全国的の利用拡大し、外客誘致に不断的の努力を続けつつ日本唯一の国際的使命を帯べる国立公園の実現へと邁進しつつあり」

本パンフレット発行少し前の昭和9年3月、雲仙は霧島、瀬戸内海と共に国立公園の第一次指定を受けた。「外客誘致に不断的の努力を続ける国際的使命」の一文はいささか大げさで気負い



が目立つが、当時、雲仙が置かれた立場と、時代の空気を表している。

外国人旅客を積極的に誘致しようとする動きは、周知のとおりジャパン・ツーリスト・ビューロー設立(明治45年)以降盛んになり、昭和に入ると「外客誘致ニ関スル建議」(昭和4年)の可決を受けて、昭和5年、外客誘致に関する事項を掌る国際観光局が設置された。背景に外貨獲得といった国家的課題があり、その時代の空気が漂うパンフレットといえよう。

宿泊施設として、当時、雲仙にホテル七、旅館二十数軒を数えた。ホテルについて次の記述が見られる。

「殊に夏期は支那沿岸の居住外人を以て超満員の盛況を呈し、国際親善外客誘致の国策遂行に多大の貢献をなしつつあり」

雲仙には古湯、新湯、小地獄の三温泉があり、明治11年開発の新湯が外国人向きの温泉地で、そこにホテルが立地した。「目下建築中のホテル二軒、増築中のホテル二軒がある」と、雲仙温泉の繁栄ぶりを物語る記述も見当たる。「国策遂行に貢献」を掲げ、建設ラッシュに沸き立つ温泉地の空気が伝わる一文である。次いで、旅館についての記述を示す。

「近年殊に増加せし全国的大衆観光客を吸収収容して遺憾なく、ホテル、旅館と相提携して雲仙の如く国際的使命を有する観光遊覧地としての宿泊施設の重要使命を果しつつあり」日本人向きの旅館が集まっているのは、古湯である。その起源は、承応2年(1653)に加藤善佐衛門が雲仙に湯壺を開き、寛文12年(1672)に二代目善佐衛門が古湯に湯壺を掘ったことに由来する、とされる。昭和9年当時、「大衆観光客」もまた群をなして押し寄せる有様で、外国人のみならず日本人客も急増し、日本旅館数軒も増築中という状況であった。日支事変勃発約3年前の雲仙は、そんな観光旅行ブームに沸き立っていた。

本パンフレットには、雲仙の娯楽施設として、ゴルフ場、テニスコート、冷水プール、ローンガーデン、ベビーガーデン、弓道場の紹介がなされている。先ず、ゴルフ場について、「内外人に知られ雲仙娯楽施設中の白眉である」と記す。大正2年、わが国最初のパブリックコースとして開かれた雲仙ゴルフ場は、当時、一日二円で自由にプレイを楽しむことができた。次いで、テニスコートは六面あり、半日、五十銭で遊べた。また、夏期開催される国際庭球大会は夏期行事の一つである、と記す。さらに、プール、弓道場とも内外人に利用されている旨が示されている。このほか雲仙には、乗馬倶楽部もあったことが記載されている。

湖沼・瀑布として、白雲池をはじめ広河原池、諏訪池、一切経の滝、稚児落の滝などの見所も記載されている。その一つ、白雲池を例示する。

「絹笠山麓にあり、四時紺碧の水を湛へ、山間の環境と相俟って幽邃の仙境たり、毎夏此の池畔に国際観光局よりテント村を開設し、内外人の利用多く、雲仙夏期名所の一つである」

夏になると白雲池のほとりに、鉄道省国際観光局によるテント村が開設され、内外の人で賑わった。昭和2年、前述した「日本新八景」の取材で雲仙岳を訪れた菊池幽芳は、白雲池周辺の光景を「金髪の女や幼女が、青や黄や赤や、スマートな服装をして池辺に戯れたり、ボート

を漕いだりしているのも、外国らしい感じを抱かせる」と記している。<sup>16</sup>

本パンフレットは、国策に沿って外国人観光客誘致に励む雲仙の姿を窺い知る恰好の資料といえよう。

### (3)「国立公園大阿蘇案内」(大阿蘇国立公園協会、昭和11年)

大阿蘇国立公園協会発行(昭和11年5月)の「国立公園大阿蘇案内」〈資料3〉は、54×39.5cmの用紙を十二折りにしたもので、一面は「国立公園大阿蘇案内図」(縮尺十万分の一)、裏面は阿蘇の観光案内文である。定価10銭である。発行元の大阿蘇国立公園協会は、阿蘇国立公園期成会(大正10年代創立)を拡大する形で昭和3年に設立された組織で、熊本県庁内に本部が置かれていた。

〈資料3〉「国立公園大阿蘇案内」  
(大阿蘇国立公園協会、昭和11年)



**〔内容〕**大阿蘇の車中展望、大阿蘇の生成、特異の風景、阿蘇の人文、阿蘇の位置、中岳及噴火口、登山自動車道、高岳、根子岳、山黨へ紹介、烏帽子岳と杵島岳、重なる展望地、阿蘇神社、西巖殿寺、山の温泉、溪谷温泉栃木・戸下、内牧温泉、深葉山、久住山

本文は〈資料3〉の通りで、阿蘇山の生成、人文等の内容を含めて幅広い内容を扱っている。本文中に写真10枚を掲載している。阿蘇五岳、五岳の霧氷、米塚と外輪山、噴煙の壮観(2枚)、登山道二合目を走るバス、根子岳、草千里ヶ浜、戸下温泉、深葉山の清流と、いずれも阿蘇を象徴する風景である。

案内文は、熊本から豊肥線に乗って阿蘇山登山口の坊中に至る車窓風景の記述から始まる。先ず、阿蘇谷白川および南郷谷黒川の水を集めた火口瀬・立野からの記述を示す。

「立野駅からスイッチバックして火口原に入れば夜峯、烏帽子、杵島等の火口丘群が次々に展開し、(中略)赤水駅の付近右手の裾野は下野狩場跡、左窓には終始外輪山が現はれ、内牧駅では遠見鼻が目立って見える。噴火口への登山口坊中駅に来ると噴煙が望まれ、高岳・根子岳の山容は次の宮地駅から最も佳く眺めらる」

豊肥線車窓から望む阿蘇五岳の雄姿を記述し、旅へ誘うのである。文中、熊本と大分を結ぶ豊肥線を「国際観光路」と記していることが注目される。次いで、坊中駅から山上に達する登山自動車道の記述である。

「極めて爽快な道路で日本一の称がある。(中略)大阿蘇観光道株式会社の流線型バスが悠々と走り坊中駅から山上まで火口見物共往復約三時間で大阿蘇の大観を恣にすることが出来る」

坊中からの登山自動車道は、「県立公園道路」として昭和3年冬に県議会で敷設を議決し、

昭和6年秋に陸軍特別演習を機に竣工したものである。この自動車道を走るバスを利用することにより、阿蘇の火口見物は坊中駅から山上往復3時間に短縮された。従来の徒歩による阿蘇の火口見物の往復時間は6時間半を要したため、半分の時間で阿蘇観光が楽しめるようになったのである。

大阿蘇案内図には、立野から湯の谷温泉、烏帽子岳南側を經由して山上の古坊中に至る自動車道計画路線も記入されており、これも間もなく完成予定である、と記す。また湯の谷温泉付近に、「国際大ホテル建設予定地」と記入されている。後述する阿蘇観光ホテル(昭和14年開業)のことである。また、道路やホテルの建設が実現の暁は、「国際的休養地としての大阿蘇の使命は一段と重きを加へる」とも記す。これに関連して次の記述が注目される。

「大阿蘇は熊本県の東部九州の地理的心臓部に位し、大阪、神戸を起点に瀬戸内海、別府、阿蘇、熊本、雲仙、長崎を結んで上海、香港に至る国際観光路の中枢を占め…」

雲仙の項でも触れたが、外国人観光客誘致を想起させる一文である。文中に「国際観光路」と題する略図が挿入されている。略図には、上海～長崎～雲仙～熊本～阿蘇山～別府～瀬戸内海～神戸・大阪間のルートが示され、長崎～別府間を「国際観光路」と表示している。また、次の文章が続く。

「四周に泉都別府、高原美の久住、奇溪耶馬、水郷日田、神峡高千穂、霊山霧島、日本三急流球磨川、名城熊本、景勝三角及び天草、秀峯雲仙等羅列し正に九州風景地帯の王座で又九州風景計画及視察観光の核心である」

阿蘇山は、九州における風景の王座で、また観光の核心である、と謳うのである。ここに記された観光地は、前掲の「沿線案内」(門司鉄道局、昭和12年)にみる九州の主要観光地とほぼ重なっていることを指摘したい。

本パンフレットは、阿蘇山最大の見所である中岳および噴火口の紹介をはじめ、五岳最高峰である高岳、灌木が密生し奇岩怪石がある根子岳、阿蘇南半の眺望によい烏帽子岳、北半の展望に適する杵島岳、阿蘇山の展望地として優れる草千里ヶ浜・大観峰・御成山付近を紹介する。ほかにも阿蘇神社、西巖寺の歴史を記すとともに、烏帽子岳西方裾野にある湯の谷・地獄・垂玉の三温泉、白川溪谷付近の栃木・戸下の二温泉、やや離れて北方平坦部にある内牧温泉にも触れる。内牧温泉では昭和9年に町営温泉の営業を開始したこと、町の学校を利用して十数年来「夏季大学」を開いて阿蘇開発の紹介を行っている旨が記されている。本パンフレットは、阿蘇を観光地として盛り上げていこうとする時代の空気が伝わる一葉である。

#### (4) 阿蘇の温泉旅館・ホテル

阿蘇の宿泊施設の事例として、戸下温泉の碧翠楼、及び湯の谷温泉に建設された阿蘇観光ホテルのパンフレットを紹介したい。碧翠楼発行の「国立公園阿蘇山麓戸下温泉案内」(年代不明)〈資料4〉は、四折り18.1×9.6cmパンフレットで、名古屋市の澤田文精社印刷の鳥瞰図が掲載されている。この鳥瞰図は立野の火口瀬付近から阿蘇を眺めたもので、中央に濛々と噴煙をあ

げる中岳をおき、その周囲に根子岳、高岳、杵島岳、烏帽子岳を配す。そして、左手に阿蘇谷を流れる黒川、右手に南郷谷を流れる白川を描き、その周囲を外輪山が取り囲む構図である。西方から眺める阿蘇の姿が手に取るようにわかる一枚である。

先ず、白川と黒川の合流地点に建つ碧翠楼の案内文である。

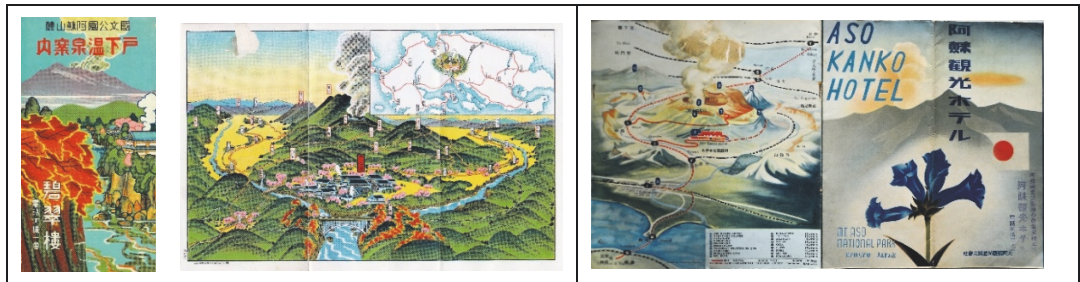
「翠巒四方を圍繞し、溪流碧潭を周らし幽邃閑雅全く俗塵を離れたる仙境でございまして、客舎崖に寄りて建ち溪声を枕下に聴く趣きの深き処であります」

〈資料4〉「国立公園阿蘇山麓戸下温泉案内」

(碧翠楼、年代不明)

〈資料5〉「阿蘇観光ホテル」

(大阿蘇道観光株式会社、昭和14年以降)



鳥瞰図を見ると、崖の上に二階建ての和風建築が幾棟も連なる。碧翠楼は、客室総数七十余、百畳敷の大広間、撞玉場、卓球場、娛樂室を備えた大旅館であった。立野駅から汽車発着時ごとに旅館専属の自動車を走らせ、客の便を図っていた。また、こんな記述が目を引く。

「当温泉は雲仙国立公園—島原—三角—熊本—阿蘇国立公園—別府温泉を連ぬる国際観光遊覧コースの要衝に当って居ります」

この「国際観光遊覧コース」は、前述した「国際観光路」を遊覧するものであろう。なお、明治15年に開かれた戸下温泉は、夏目漱石など著名な文人が訪れた由緒ある温泉として知られていた。しかし今、この鳥瞰図に描かれた碧翠楼の景観は消え去り、その付近は、立野ダム建設資材運搬のために架設された長陽大橋が横たわっている。

もう一つの大阿蘇道観光株式会社が発行した「阿蘇観光ホテル」〈資料5〉は、21×19cm、四頁のパンフレットである。ホテル開業が昭和14年であるため、パンフレットはそれ以降のものであろう。阿蘇観光ホテルは、湯の谷温泉の丘陵上にあり、スイス風のデザインを取り入れた三階建ての洋館であった。ホテル内の設備は、洋室46、和室4、社交談話室、読書室、展望室、食堂、宴会場、バー、グリル、理髪室、娛樂室、写真暗室、売店、公衆電話室を備えていたことが記されている。

裏表紙は、阿蘇山を中心にその中腹に阿蘇観光ホテルを配し、手前に有明海、背後に瀬戸内海を描く鳥瞰図となっている。注目すべきは、島原半島から三角港、熊本を経て阿蘇山北麓を周り別府に至り、それより瀬戸内海を神戸に向かう「INTERNATIONAL TOURING ROUTE」と記された経路である。あの「国際観光路」である。阿蘇山周辺の名所も英文表記を併記する。



「国策ホテル」として建設されたホテルらしき案内図といえよう。なお、阿蘇観光ホテルは平成 12 年に閉館となり、跡地は廃墟と化した。

#### (5)「霧島国立公園」(霧島国立公園協会、昭和 15 年頃)

霧島国立公園協会が発行した「霧島国立公園」〈資料 6〉は、霧島国立公園の概要を知る三折り 19.5×11.7cm のパンフレットである。同協会は、霧島国立公園が指定された昭和 9 年に『霧島国立公園案内』(57 頁の冊子) を刊行している。本パンフレットは、そのダイジェスト版とも言える。本パンフレットに発行年は記されていないが、本文中の記述から昭和 15 年頃と考えられる。理由は、「霧島神宮古宮址には最近天孫降臨祭の古式の斎場が施設された」とあり、皇紀 2600 年記念事業の一つとして昭和 15 年に斎場が設けられたことが挙げられる。表紙は、右肩に御鉢、左肩に二子石を従えて聳える高千穂峰の写真を配し、裏面に霧島国立公園の略図を載せる。本文は、〈資料 6〉の内容である。小見出しに「聖地及観光地点」と題しているのは、いわゆる「敬神修練旅行」が奨励される戦時体制下の時代を反映したもの、と考えられる。本文中に添えた写真 3 枚は、大浪池と韓国嶽、霧島の霧氷、霧島神宮神橋である。

#### 〈資料 6〉「霧島国立公園」(霧島国立公園協会、昭和 15 年頃)



先ず、霧島国立公園の概観の記述を示す。

「霧島国立公園は鹿児島、宮崎の二県に跨り、(中略) 霧島火山群の主峰高千穂峰、韓国嶽を両軸に、新燃嶽、獅子戸嶽、夷守嶽、甕岳、白鳥山、栗野岳等十八に達する秀峰を集め、完全火口を有してゐるもの十五座、其の中水をたたへてゐるもの、御池、小池、大幡池、不動池、六観音池、びやくし池、大浪池、湯之池の八火口湖を数へ…」

以上、霧島の山々の地理的特徴を述べ、その地学的特徴は広く世界に誇り得るものである、と記す。霧島火山群の最高峰は韓国嶽 (1,700m) であるが、主峰は高千穂峰 (1,574 米) と謳っている。記述を続ける。

「国民的憬仰をあつむる天孫降臨の霊地高千穂峰、霧島神宮を始め狭野神社、霧島東神社、白鳥神社等由緒深い神社霊地に富んでゐる事は霧島国立公園を最も特異づける、更に霊峯

の中腹高千穂河原なる霧島神宮古宮址には最近天孫降臨祭の古式の斎場が施設された」  
 霊地高千穂峯、霧島神宮をはじめ、由緒深い神社霊地に富んでいることは霧島国立公園を最も特異づける、とする記述は、戦時体制下の時代を反映した捉え方といえよう。

さらに、霧島国立公園の自然についての記述である。

「山の中腹以下山麓一帯は他の国立公園に類例を見ない暖帯常緑活闊葉樹の鬱蒼たる天然林に包まれ、中腹以上はモミ、アカマツを主とする森林となり、登るに従って漸次温帯林の特徴を深め、其の上方は広大な原野となる。有名なミヤマキリシマは此の原野地帯に新燃嶽、中岳を中心に分布してゐる」

霧島山中の植生がよくわかる一文である。そして、植物種類の豊富なことも霧島国立公園の誇り得るところ、と記す。ほかの植物では、霧島固有種のノカイドウも紹介されている。

また、霧島国立公園内には温泉が豊富で、霧島温泉郷を形づくっていることを述べるとともに、次の記述で概観の結びとする。

「本公園は聖地及社寺巡拝、自然研究、登山、野営、保養等に優れ、春、夏、秋、冬何れの季節たるを問はず之を訪れるに適し、其の探勝者は年々夥しい数に上つてゐる」

今や、戦争が始まらんとする時期においても、なお探勝者が夥しい数に上っている、とは気にかかる一文である。聖地及び社寺巡拝の人が増えたのか、それとも、昭和初期に大いに高まっていた旅行熱が未だ冷めやらなかったのか、いかに捉えて良いか判断に迷う。本パンフレットは、戦時体制下での国立公園の捉え方、観光旅行を知る一資料である。

### 3.景勝地、耶馬溪・日田・唐津

#### (1)耶馬溪・日田・唐津への旅

わが国有数の景勝地の一つとして、耶馬溪が挙げられる。江戸中期以降、羅漢寺や青の洞門は世に知られた名勝地であった。天明3年(1783)、羅漢寺や洞門を訪れた古河古松軒は『西遊雑記』を著す。また、文政元年(1818)、山国川に沿った溪谷を探勝した頼山陽がその地を「耶馬溪」と命名する。大正2年、耶馬溪鉄道の中津—樋田(洞門)間が開業し、翌3年に柿坂まで延伸して耶馬溪探勝が便利になった(昭和50年廃止)。大正8年、菊池寛が青の洞門に伝わる話を題材に『恩讐の彼方に』を著し、その刊行は世人の耶馬溪への関心を高めた。大正13年には柿坂—守実間が開通して耶馬溪鉄道が全通する。昭和2年、田山花袋・小杉放庵が『耶馬溪紀行』を著し、耶馬溪が観光地としてますます脚光を浴びてゆく。

耶馬溪鉄道が柿坂まで延びた数年後の、大正中期の耶馬溪探勝の様子を、『鉄道旅行案内』(大正7年)<sup>17</sup>から見ていこう。

「中津よりは樋田、羅漢寺を経て柿坂まで軽便鉄道の便あり、樋田に近き鮎返より漸く風光の美を現はし、仏坂より青生の洞門に至れば、路は筈の如き攢峯の山腹を穿ち、川に沿うて通じて居る、洞傍舟津あり、傭うて対岸より望めば、苔蒸したる絶壁の下乱松逆に倒れ、危巖突兀たる間、人馬洞門を出入する光景、宛として画のやうである」

鮎返は、洞門より約 2 km 下流に位置する急流で、いよいよ、この付近から耶馬溪の風景が展開する。「筍の如き攢峯」とは、その位置から競秀峰のことであろう。この記述から、大正中期には山国川に舟を浮かべてこの風景を眺めていた様子うかがえる。また、羅漢寺の門前まで人力車や馬車が通っていた記述も見られる。柿坂より南に行くと深耶馬溪があり、その奇勝は本溪に勝ると説く人が多いことも記されている。

大正後期の『鉄道旅行案内』(大正 13 年)には山国川に舟を浮かべて風景を愛でる記述は見られなくなる。<sup>18</sup>羅漢寺駅から門前には人力車に替わって自動車が往来するようになった。また、柿坂から守実を経て日田へ馬車や自動車が通じたため、日田から筑後軌道で久留米に抜けることが容易になった。さらに昭和に入ると、深耶馬溪駅から森町に至る乗合自動車が運行を開始したため、深耶馬溪を探勝した後、豊後森町駅(昭和 4 年開業)まで出て日田を経て久留米に至るルートが加わった。<sup>19</sup>

『日本案内記九州篇』(昭和 10 年)<sup>20</sup>では、耶馬溪の範囲を広げて「十溪」とし、それらの名所を悉く解説している。同書には、三つの耶馬溪観光日程案が掲載されており、昭和初期の耶馬溪探勝の姿を知るうえで参考になるので紹介したい。

「日帰り案 (一) 青洞門―羅漢寺 (二) 耶馬溪鉄道沿線、深耶馬溪一部

一泊案 第一日 深耶馬溪一目八景(徒歩麗谷往復)―竜門の滝―裏耶馬溪―下郷(或は深耶馬、羅漢寺)泊 第二日 羅漢寺―青洞門

二泊案 第一日 一泊案第一日に同じ 第二日 西椎屋の滝―谷の川内―深耶馬溪鹿倉隧道(または内帆足の四十三滝)―森町(深耶馬駅付近、羅漢寺駅付近)泊 第三日 羅漢寺―禅海堂―青洞門」

日帰り案では、青の洞門、羅漢寺等が主な見所として現れる。一泊案では、深耶馬溪の一目八景、麗谷、竜門の滝、裏耶馬溪等が加わる。また二泊案では、さらに椎屋の滝等が加わる。旅館は、羅漢寺駅前に山国屋をはじめ 5 軒、深耶馬溪駅前に 2 軒、同鴨良に鹿鳴館、下郷駅前と守実駅前に各 1 軒あった。羅漢寺付近が耶馬溪探勝の宿泊の中心地であったことがわかる。

筑後川上流にある日田は、江戸時代天領として繁栄した土地で、その水郷風景が有名であった。大正 5 年、筑後軌道が久留米から日田の商人町である豆田へ全通し、交通の便が整えられた。<sup>21</sup>その頃の様子が『鉄道旅行案内』(大正 7 年)<sup>22</sup>に次の様に表れる。

「筑後川の上流山水秀麗の地、夙に鵜飼を以て聞えて居る。(中略)地は又広瀬淡窓の生地、今淡窓図書館あり」

日田では、6 月 15 日から 9 月 15 日まで鵜飼が行われていた。鵜飼の場所は、亀山公園付近から保木公園下に至る三隈川である。また、日田は咸宜園を開いた広瀬淡窓の生誕地としても知られ、九州の文化の一拠点であった。

玄界灘に臨む唐津は、海水浴の地、風光明媚な城下町として知られ、付近の虹ノ松原をはじめ、北部に位置する七ツ釜など名所旧跡に事欠かなかった。唐津湾に面する唐津には、緩く湾曲した白砂青松の海岸がのびており、どこをとっても海水浴に適していた。とりわけ唐津城址

の西海岸である西の浜、城址の東に連なる虹ノ松原が海水浴場として知られていた。小笠原氏の居城であった唐津城址は、左右に翼を広げたように松原がのびているため、舞鶴城の別名があった。城址からは大島などが浮かぶ海を臨み、虹ノ松原があるため、その景色をより美しく引き立てていた。また、唐津の北には、七ツ釜、呼子、松浦佐用姫伝説ゆかりの田島神社が鎮座する加部島、文禄慶長の役の前線基地であった名護屋城跡と多くの見所があり、夏期は、七ツ釜・呼子廻遊の遊覧船が出ていた。

唐津へは、早くも明治 30 年代初頭、唐津線の前身である唐津興業鉄道が敷設された。しかし、これは主として石炭を搬出する鉄道であった。一方、福岡市姪浜から唐津に至る筑肥線の前身である北九州鉄道が敷設された。大正 13 年に前原～虹の松原間が結ばれ、翌 14 年には南博多～東唐津間が開通する。風光の良い海岸沿いを往く鉄道で、この鉄道開通により唐津は福岡に住む都市住民の行楽・遊覧地としての性格をより強めた、と見てよいであろう。

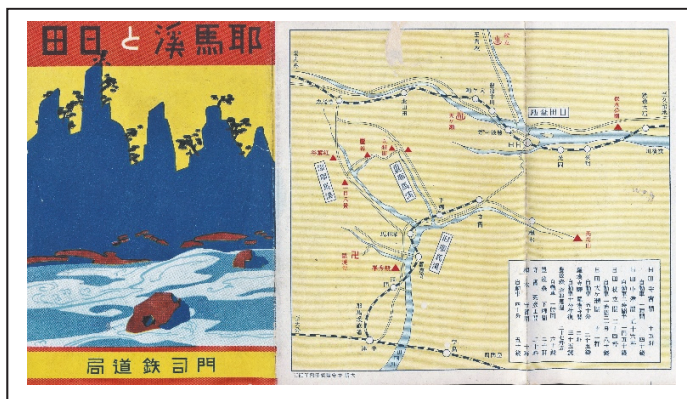
## (2)「日田と耶馬溪」(門司鉄道局、昭和 12 年)

門司鉄道局発行(昭和 12 年 9 月)の「日田と耶馬溪」〈資料 7〉は、耶馬溪探勝や筑後川上流の水郷として知られる日田盆地の観光名所を知るうえで手掛かりとなる、五折り 15.5×10.5cm のパンフレットである。表紙は山国川の背後に屹立する奇岩を描いた耶馬溪の絵柄で、裏面に日田盆地、旧耶馬溪・深耶馬溪・裏耶馬溪の略図を掲載する。文中に写真 4 枚(羅漢寺・裏耶馬溪・日田盆地・筑後川下り)を添え、耶馬溪・水郷日田盆地・付近の名所を解説する。

先ず、耶馬溪の解説文を示す。

「耶馬溪は山国川の流域五〇軒余に亘る峡谷の総称で、旧耶馬・深耶馬・裏耶馬の三大溪から成って居る、旧耶馬は青の洞門及羅漢寺付近から耶馬溪鉄道に沿ひ守実を経て英彦山に至る一帯の溪山で、従来此処を耶馬溪と称して居ったのである」

### 〈資料 7〉「日田と耶馬溪」(門司鉄道局、昭和 12 年)



耶馬溪は、旧耶馬溪・深耶馬溪・裏耶馬溪の三大溪谷から成っているが、従来「耶馬溪」と称したのは旧耶馬溪である、と説く。次いで、深耶馬溪駅から久大線豊後森駅に至る途中にある深耶馬溪は、景致の幽邃なことは三溪中第一、と記す。また、深耶馬溪の背面に位置する裏耶馬溪は、耶馬溪鉄道下郷駅から豊後森駅に至る約 20 kmの間に

散在する奇勝の総称である、と説明する。そして「耶馬溪は此の三溪を見て初めて、其の真趣を語ることが出来る」と説く。



次いで、耶馬溪の探勝順路を示す。

「日豊線中津駅で耶馬溪鉄道に乗換へると、約二十五分で洞門駅を過ぎて山国川の鉄橋に差ししかかった頃、車窓の左に青の洞門及び競秀峰などを眺むることが出来る。次の羅漢寺駅で汽車を降り羅漢寺に往復して、再び汽車で十六分、車窓に奇勝を眺めつつ深耶馬駅に到着する」

旧耶馬溪の主な見所として、青の洞門<sup>23</sup>、競秀峰<sup>24</sup>、羅漢寺<sup>25</sup>、擲筆峰<sup>26</sup>が紹介されている。大正中期の舟を浮かべて競秀峰を見ていた時代から、汽車の窓から奇勝を眺める、そのように旅の楽しみ方が変わったことが見て取れる。羅漢寺駅から寺の下まで自動車が往復していた。

次は、深耶馬溪の探勝である。

「深耶馬は此处から自動車で約三十分、一目八景付近で自動車を降り、徒歩で麗谷を見る。

更に自動車又は徒歩で沿道の奇勝を賞しつつ豊後森駅方面に進む」

深耶馬溪の主な見所として、一目八景<sup>27</sup>、麗谷<sup>28</sup>が紹介されている。深耶馬溪駅から一目八景にある旅館鹿鳴館まで往復遊覧のバス（所要 2 時間）が出ており、案内のバスガールが添乗していた。また、鹿鳴館及び山彦前には展望台が設けられていた。鹿鳴館から豊後森駅まで自動車で 30 分の行程であった。また、豊後森駅から自動車による一目八景への遊覧（所要 2 時間）もあった。

三つめは、裏耶馬溪の探勝である。

「深耶馬溪から裏耶馬溪に出るには、更に進んで森町を経て下郷駅に向って下る」

裏耶馬溪の主な見所として、伊福峽<sup>29</sup>、山田飛猿谿<sup>30</sup>、立羽田<sup>31</sup>、坂の上<sup>32</sup>、鶴ヶ原<sup>33</sup>が紹介されている。

本パンフレットは、『日本案内記』に掲載された耶馬溪の見所を絞り込んで解説しており、探勝順路の記述がより具体的で、実用的である点を特色とする。

### (3)「耶馬溪案内」(耶馬溪鉄道株式会社、戦前)

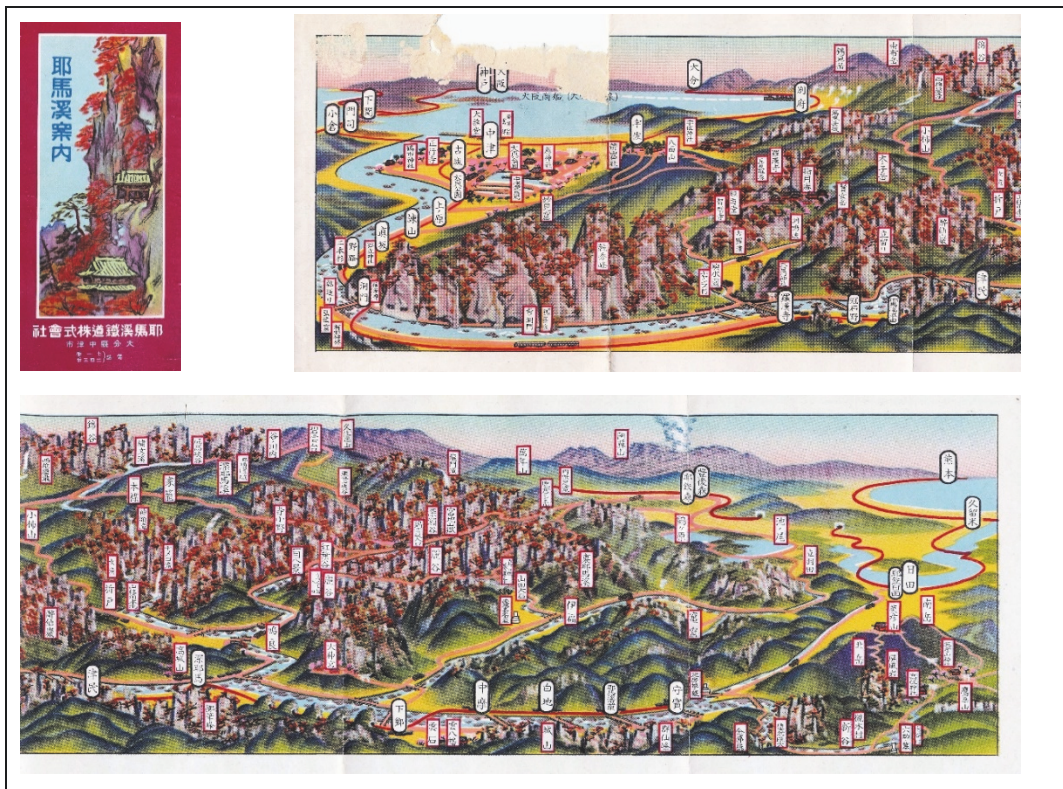
耶馬溪のパンフレットとして、ほかに、耶馬溪鉄道株式会社が発行した「耶馬溪案内」(資料 8) がある。発行年は記されていないが、いわゆる「国策旅行」の一つである「青少年徒歩旅行」<sup>34</sup>の記載が見られるため、昭和 13 年以降のものであろう。六折り 19.4×9.0cm のパンフレットには、鳥瞰図が掲載されている。中津を起点に山国川沿いを走る耶馬溪鉄道沿線を、洞門から鉄道終点の守実にかけて描いた構図である。鳥瞰図の作者は不明である。

同社は、大正期に耶馬溪の鳥瞰図を発行しており、その一つとして吉田初三郎「奇勝耶馬全溪遊覧交通図」(大正 15) <sup>35</sup>が知られている。この鳥瞰図は、山国川を下段におき、上段背後に峰々を配し、左上に鉄道起点の中津の街、鶴見岳、由布岳、瀬戸内海を、右上に阿蘇山、有明海を描く構図である。鶴見岳の下には別府の街があり、大阪・神戸から大阪商船が別府に通じている。また、山国川支流に二つの溪谷が描かれている。

〈資料 3〉は、初三郎の筆ではないが、構図的にまったく同一である。ただし、岩山の木々が

紅葉している色遣いになっているため、碧翠の山々を描いた初三郎の作品とは印象が大きく異なる。もう一つ違う点は、見所をより詳細に描き込んでいる点である。鳥瞰図を見よう。洞門駅から羅漢寺駅にかけて競秀峰が聳え立ち、断崖を穿つ青ノ洞門が続き、対岸には二両編成の列車が走る。羅漢寺駅から溪谷をしばらく行くと古羅漢となり羅漢寺、禅海堂、指月庵等が記されている。深耶馬駅から一目八景に至るのが深耶馬溪で、麗谷、紅葉谷等が記され、豊後森駅方面と行き来するボンネットバスが描かれている。ここは山移川流域に当たる。下郷駅から伊福方面に至るのは裏耶馬溪で、立羽田、池ノ尾、鶴ヶ原等が記され、道路はやはり豊後森駅方面に通じている。ここは金吉川流域に当たる。

〈資料8〉「耶馬溪案内」（耶馬溪鉄道株式会社、戦前）



本パンフレットには、徒歩で耶馬溪を巡る10コースの案内文が中心をなしているが、これとは別に中津駅からわずかな時間で耶馬溪を探勝する3コースが紹介されている。一つは本耶馬溪と深耶馬溪を探勝して羅漢寺に参詣する6時間コース、もう一つは本耶馬溪と深耶馬溪を探勝する4時間コース、三つ目は羅漢寺に参詣して青の洞門を見物する3時間コースである。前掲「日田と耶馬溪」〈資料7〉に掲載された探勝順路より、さらに手軽である。一般観光客によく利用されていたのは上記三コースではなか、と考えられる。本パンフレットには、観光客に対して下記の案内が出ている。

「乗車券は省線連帯駅、日本旅行協会案内所、及大阪商船別府航路御利用の皆様のためには、大阪港並に神戸港でも連帯乗車券を発売致します」

鳥瞰図にもあるように、大阪・神戸から瀬戸内海を別府に至り、それより列車で中津まで来て、耶馬溪鉄道に乗り換えるルートを念頭に置いた記述である。また、こんな案内もある。

「団体旅行のため臨時列車を仕立てられた際は是非御乗車の儘耶馬溪線へ直通乗入れ下さい」  
臨時列車直通運転を、柔軟に受け入れようとする一文に、驚きすら覚える。さらに、サービスは行き届く。

「御観光の皆様へはガソリンカー、自動車を通じ案内係を添乗せしめ親切に解説御案内申上ます」

ほかに、少人数の団体でも案内をするから、予め一報するようにと促す。同社は、観光案内をするばかりか、食事、休憩、土産の購入等、一切の世話をする、と謳って誘客に努めている。

耶馬溪は、頼山陽が「耶馬溪山天下無比」と絶賛したことにより、無双の景勝地として世に知られるようになった。さらに大正 12 年に名勝・天然記念物に指定されて以来、耶馬溪の名が世間に遍く知れ渡り、大正 13 年、耶馬溪鉄道が全通して探勝の便が整う。昭和に入ると、鉄道会社は観光客に向けて多様なサービスを提供して耶馬溪観光を盛り上げていたことが本パンフレットから伝わってくる。

#### (4) 水郷日田盆地

再び前掲「日田と耶馬溪」〈資料 7〉により日田盆地を見ていこう。日田盆地について、次のように記されている。

「筑後川の上流、三隈川平野に在り、群山四面に起伏連互して東西八軒、南北八軒の盆地を形成し、南に三隈川、北に花月川が流れ、その支流又縦横に貫流して絵のやうな水郷をなしてゐる。三隈川の鵜飼と舟遊は特に名高い」

筑後川上流の盆地にある日田は水郷景観を特色とし、鵜飼や舟遊びで知られるところであった。筑後川下りの舟が日田の街から出ていた。日田盆地の中心地が日田町である。

「幕政時代に九州政治の中心地をなし、又文化と文教の中枢地として江戸・長崎との交通頻繁にして、夙に開化の風をうけてゐた。殊に自然の風光に至っては。恰も京都に髣髴たるものがあるので、古来『九州の京都』と称されてゐた」

日田は幕府直轄の天領であり、九州の政治・文化の一拠点をなしていた。また、その風光は京都に似ていることが、すでに戦前から知られていた。戦後の「小京都ブーム」以前に、京都になぞらえている点が興味を引く。次いで、日田の遊覧順序が示されている。

「咸宜園趾（淡窓図書館）―月隈公園―慈限山公園―長生園（淡窓墓所）―五岳上人銅像―亀山公園―台霧の築」

日田は、さほど大きな街ではないが、多くの見所があった。日田の名を天下に轟かせたのは広瀬淡窓であり、その私塾咸宜園跡が観光ポイントになっていた。また、日田では、月隈公園、



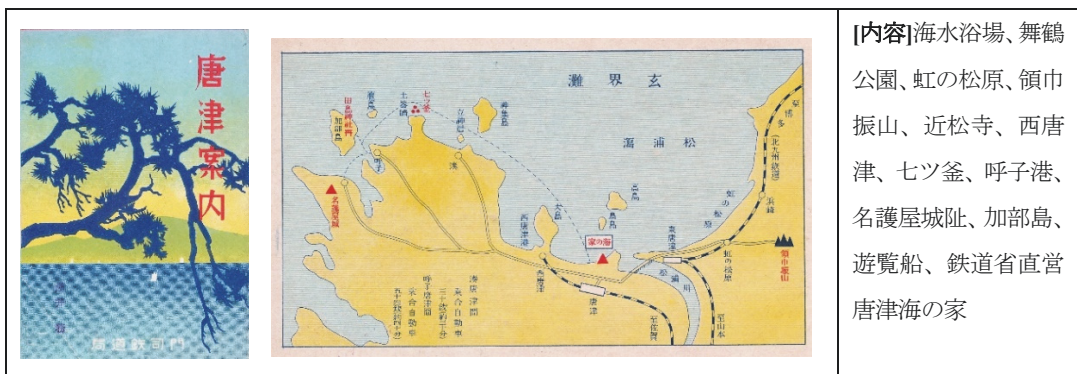
慈眼山公園、亀山公園の三公園が名所として知られていた。月隈公園は、江戸時代に九州政治の中枢をなした永山布政所、明治初年には日田県庁が置かれた地を公園としたもので、丘の上は風致良好であった。慈眼山公園は、清流に臨む丘に設けられ、丘の上から盆地を瞰下するのに手ごろな場所であった。丘の麓に永興寺が建ち、国宝の仏像があった。亀山公園は、三隈川の中央にあって島のような姿をした水郷風景を味わえる公園で、丘の上には楠正成を祀る日隈神社が鎮座する。そこは四季折々の眺めがよく、とりわけ桜の名所として知られていた。

日田の観光として、筑後川下り、三隈川の鵜飼についても紹介されている。筑後川下りは、三隅川岸から舟に乗り、大明神の岩・神の淵・長溪・小溪の瀬などを経て保木公園まで約二時間かけて下っていたことがわかる。また、六月一日から十月中旬まで三隈川で鵜飼が行われ、鵜飼見物の遊覧船が出ていた。日田は、水郷情緒を味わう観光地として多くの楽しみがあったことがこれらの記述から読み取れる。

#### (5)「唐津案内」(門司鉄道局、昭和11年)

門司鉄道局発行(昭和11年11月)の「唐津案内」〈資料9〉は、唐津とその周辺の見所を記した、五折り15.4×10.2cmのパンフレットである。玄界灘に臨む景勝地・唐津が付近の名所旧跡を含めて清遊地になっていたことをうかがい知る一葉である。表紙は、松の枝ごしに望む玄界灘に白帆の船が浮かぶ絵柄である。裏面は、唐津から七ツ釜、呼子、名護屋城跡にかけての略図を掲載する。文中に写真3枚が添えられている。舞鶴公園から見た領巾振山と虹の松原、七ツ釜、鉄道省直営唐津海の家であり、唐津を代表する名所と海水浴関連施設である。本文の内容は、〈資料9〉の通りである。

〈資料9〉「唐津案内」(門司鉄道局、昭和11年)



先ず、唐津案内の冒頭文を記す。

「唐津市街は此の松浦湾に沿うて横に長く、松浦川を隔て万松一路、白波の岸を走る虹の松原に続く風光明媚の地、殊に海水浴の好適地として有名な所である」

玄界灘の松浦湾(唐津湾)に沿って家並みが広がる唐津は、松浦川を隔てて虹の松原があり、



風光明媚な地である、と述べる。記述を続ける。

「此の地は単に風光の明媚、海水浴の好適地なるのみならず、舞鶴公園・虹の松原・近松寺・立神岩・七ツ釜・領巾振山・佐用姫神社・名護屋城址等見るべく又探るべき名勝史跡が多い」

また、唐津は風光明媚、海水浴に適するばかりか、名勝史跡が多いことを記す。そして、豊かな歴史の資料は、優美な風光と相俟って唐津の天地を詩化している、と説く。小笠原氏の城跡が舞鶴公園である。

「石段を廻り廻りて登ると、そこからは山や海も街も村も一眸の裡に見渡され、眼下に流る松浦川を静かに上下する白帆や、其の河口に架けた六〇〇米余の長橋を走る自動車が豆自動車の如く丁度飛行機の上からでも見る様な眺めである」

松浦川河口に位置する丘に築かれた城跡に登ると、北に玄界灘・松浦潟、南に松浦川流域の村々が一望できる。河口に架けた長橋とは、松浦橋のことである。橋の上を行き来する自動車が豆自動車のように見えるとは、城跡と橋の距離感をうまく言い表している。次は、鶴舞の呼称の由来である。

「右方八軒の大弧形を画いて続く虹の松原が鶴の右翼に、西の松原が其の左翼に、湾内の鳥島が頭となり、市街がその腹に髭鬚して居るので、ここを舞鶴城又は舞鶴公園と称するのである」

唐津の地形を、うまく表現した一文である。鳥島は、今は陸続きとなった大島と沖の高島の間に浮かぶ小島である。そして虹ノ松原は、ここ舞鶴公園の丘から眺めるのが最もよい、と説き、その名の由来を記す。

「松原の翠緑に渚の白砂それに海面の水色を加へて、虹を地上に描いた様に、虹の松原の名亦之に因るのである」

ここでは、緩く湾曲する松浦潟に連なる白砂青松と海の色三色の虹に見立てているが、海面の水色とは夕陽に映える紅色の海を指す。

「虹の松原は唐津の生命で、仮りにこの松原を取り去るならば松浦潟の風光は、竜を画いて眼を点ぜぬ死画の類である。満島から浜崎まで八軒の間は数百年を経たる老松が、翠を連ねて幾万株となく続いて居る」

虹の松原あつての唐津である、と言う。当時、松林の中に、海浜ホテル、東屋ホテル、松屋ホテル等があつて、夏季、海水浴客で賑わっていた様子が記されている。また、松原の中ほどにある二軒茶屋には茶店数軒があつて、名物「松原おこし」を商っていたことも記されている。

虹の松原海岸と唐津城址の西に広がる西の浜海岸は、いずれも海水浴場として利用されていた。海水浴場には、脱衣場・淡水井戸・売店の設備があつた。海水浴場にはホテルの他に二軒の旅館があつた。また、夏は自炊客に貸間する素人家が多く、市役所で貸家貸間の斡旋をしていたことが記されている。とりわけ、西の浜海岸は遠浅で、数百メートル沖に出ても危険がなく、海上に鳥島や高島が横たわり、眺めの良い海水浴場であつた。西の浜海岸には毎年、夏季、

鉄道省直営の海の家が開設された。海を家の記述を紹介する。

「海の家には休憩所・脱衣所を浴場は勿論のこと、娯楽機関としてラヂオ・蓄音器などを備付け其の他水泳用具、広場には、運動用具等一切を整へ、又食堂ではなるべく簡易なものを安価に提供する等、総てが利用者本位、大衆本位になってゐるから、経済的理想的銷夏場として、近郷都市から家族件（ママ）れで一日の清遊には恰好の所である」

海の家は、五百名収容できる規模を誇り、水泳用具や運動用具もそろえてあり、安価な食堂も設置されていた。ラジオや蓄音器の設備を売りにした賑やかな夏の海辺が目につく。

虹の松原に隣接した名所として、松浦佐用姫の伝説の舞台である領巾振山も紹介されている。当時、この領巾振山の頂上まで自動車道が開鑿され、絵のような風光を眺めることが容易にできるようになっていた。

唐津郊外の見所として、市街地の北西部にある七ツ釜、呼子、名護屋城址、加部島が紹介されている。夏季には、唐津～七ツ釜～田島神社～名護屋城址を約5時間かけて巡る遊覧汽船が運行していた。また、唐津北方の湊や呼子から小舟を雇って探勝することも可能であった。風のない日は、七ツ釜の洞窟内に舟を漕ぎ入れることもできた。呼子は、箱庭のように美しい港で、夏季は避暑を兼ねて史跡を巡り、絵を描きに訪れて滞在する人も少なくない、と記す。唐津は、博多からほどよい距離にある都市近郊の遊覧地であったことが本パンフレットから浮かび上がってくる。

## まとめ

以下、本稿で取り上げた観光パンフレットの特徴を整理して、まとめとしたい。

昭和初期の九州の観光地を概観するものに、「沿線案内」（門司鉄道局、昭和12年）〈資料1〉がある。掲載された門司鉄道局管内案内図に、九州全県の主要観光地15か所が丸印で記入されている。それは、英彦山・唐津・嬉野温泉・雲仙嶽・阿蘇山・球磨川・耶馬溪・日田盆地・久住山・高千穂峽・青島・霧島山・指宿温泉・池田湖・野田郷荒崎の鶴である。上記15か所に別府を加えた極めて類似した地図が、『旅程と旅費概算』（昭和5年版）に載っている。この16か所が昭和初期の九州における主要観光地として捉えられていた、とみなして差し支えないであろう。本稿では、その中の雲仙・阿蘇・霧島・耶馬溪・日田・唐津を取り上げた。

雲仙が観光地として発達するのは、明治44年、県営雲仙公園が開設されたことを契機とする。昭和2年に雲仙岳は「日本新八景」山岳部門第一位に選ばれ、昭和9年には雲仙国立公園が誕生する。「雲仙天草案内」（九州商船、昭和9年頃）〈資料2〉は、国立公園雲仙および景勝地天草の案内パンフレットである。本パンフレットには、雲仙は、「日本新八景」第一位獲得により登山者が激増し、二十数か国から欧米人が避暑に訪れるばかりか、国内は関西方面をはじめ全国から登山客が訪れるようになったことが紹介されている。併せて、「外客誘致に不断の努力を続ける国際的使命を帯びる国立公園の実現に邁進」、「国際親善外客誘致の国策遂行に多大の貢献をなしつつある」とも記す。また、掲載された鳥瞰図からは、上海～長崎～雲仙

～阿蘇～別府～瀬戸内海～阪神を結ぶルートが想起される。

阿蘇を訪れる観光客が増えたのは、大正 7 年に熊本～宮地間を結ぶ宮地軽便鉄道が開通したことによる。また、昭和 6 年、坊中駅（現阿蘇駅）から米塚、草千里を経て阿蘇山上に至る自動車道が完成し、翌 7 年、乗合自動車の運行が始まった。以来、阿蘇山は多くの観光客を集め、昭和 9 年には阿蘇国立公園が誕生する。「国立公園大阿蘇案内」（大阿蘇国立公園協会、昭和 11 年）〈資料 3〉は、乗合自動車で阿蘇山に登るようになった時代のもので、ここにも長崎から雲仙、熊本、阿蘇山を経て別府に至る「国際観光路」と題するルートが図示されていることが注目される。

阿蘇の宿泊施設のパンフレットとして「国立公園阿蘇山麓戸下温泉案内」（碧翠楼、年代不明）〈資料 4〉、「阿蘇観光ホテル」（大阿蘇道観光株式会社、昭和 14 年以降）〈資料 5〉が興味を引く。白川と黒川の合流地点に建っていた碧翠楼の案内にも「国際観光遊覧コースの要衝に当って居ります」の文言が見られる。また、昭和 14 年に国策ホテルとして開業した阿蘇観光ホテルのパンフレットに掲載された鳥瞰図は、阿蘇山を中心にその中腹に阿蘇観光ホテルを配し、手前に有明海、背後に瀬戸内海を置く構図で、島原半島から三角港、熊本を経て阿蘇山北麓を別府に至る経路を「INTERNATIONAL TOURING ROUTE」と記す。

外国人旅客を積極的に誘致しようとする動きは、ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立（明治 45 年）以降盛んになり、昭和に入ると「外客誘致ニ関スル建議」（昭和 4 年）の可決を受けて、昭和 5 年に外客誘致に関する事項を掌る国際観光局が設置される。昭和 10 年前後の雲仙や阿蘇のパンフレットには外客誘致の国策の影響が濃厚に表れている、と指摘できる。

「霧島国立公園」（霧島国立公園協会、昭和 15 年頃）〈資料 6〉は、いわゆる「敬神修練旅行」が奨励される戦時体制下の時代を反映したパンフレットである。今や、戦争が始まらんとする時期においても、なお霧島国立公園の探勝者が夥しい数に上っている、との一文が注目される。高千穂峰をはじめとする聖地及び社寺巡拝の人が増えたのか、それとも、昭和初期に大いに高まっていた旅行熱が未だ冷めやらなかったのであろうか。本パンフレットは、戦時体制下での観光旅行の一面を知る一資料ではないだろうか。

江戸中期以降、名勝地として知られた耶馬溪は、大正 2 年に耶馬溪鉄道の中津―樋田（洞門）間が開業し、大正 13 年には柿坂―守実間が延伸・全通すると探勝が容易になった。「日田と耶馬溪」（門司鉄道局、昭和 12 年）〈資料 7〉は、旧耶馬溪・深耶馬溪・裏耶馬溪の主要な見所を紹介するパンフレットで、とりわけ深耶馬溪は景致の幽邃なことは三溪中第一と紹介する。併せて、本パンフレットでは、日田を取り上げ、広瀬淡窓の私塾・咸宜園をはじめ、筑後川下り、三隈川の鶉飼について紹介する。日田は、水郷情緒を味わう観光地として多くの楽しみがあったことが記述内容から読み取れる。

「耶馬溪案内」（耶馬溪鉄道株式会社、戦前）〈資料 8〉は、徒歩で耶馬溪を巡る 10 コースの案内文が中心であるが、これとは別に中津駅からわずかな時間で耶馬溪を探勝する 3 コースが紹介されている。本パンフレットには、大阪港・神戸港での大阪商船別府航路と耶馬溪鉄道の

連帯乗車券販売の案内が記載されている。瀬戸内海を別府に至り、それより列車で中津まで来て、耶馬溪に入る旅客を念頭に置いていることがわかる。耶馬溪鉄道株式会社は、観光案内をはじめ、食事、休憩、土産の購入等、一切の世話をし、と積極的に誘客に努める。鉄道会社が多様なサービスを提供して耶馬溪観光を盛り上げていたことが伝わる一葉である。

「唐津案内」（門司鉄道局、昭和 11 年）〈資料 9〉は、玄界灘に臨む唐津が付近の名所旧跡を含めて遊覧地になっていたことをうかがい知る一葉である。唐津は、単に風光明媚、海水浴好適地のみならず、舞鶴公園・虹の松原・近松寺・立神岩・七ツ釜・領巾振山・佐用姫神社・名護屋城址等の見るべき名勝史跡を数多く控えた地であった。西の浜海岸には毎年、夏季、鉄道省直営の海の家が開設された。海水浴場にはホテルや旅館もあったが、夏は自炊客に貸間する素人家が多く、市役所が貸家貸間の斡旋をしていた記述が興味を引く。また夏季には、唐津～七ツ釜～田島神社～名護屋城址を約 5 時間かけて巡る遊覧汽船が運行していた。本パンフレットから、博多からほどよい距離にある唐津は、都市住民にとって手ごろな遊覧地であったことが浮かび上がってくる。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、藤井務氏（故人）の旧蔵コレクション資料を寄贈いただくとともに、関係資料の提供・ご助言をいただいた安藤典子氏に御礼申し上げる。また、本稿は、愛知淑徳大学研究助成「自然公園を対象とする観光文化に関する基礎的研究 (No18TT26)」(平成 30～31 年度) の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として本稿で取り上げた九州地方の観光資源の現況を見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げます。

## 注

1 谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察 (1) 日光・箱根—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」(『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 10 号、2018 年、所収)。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察 (2) 富士・箱根—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」(『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第 8 号、2018 年、所収)。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察 (3) 東京近郊—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」(『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 11 号、2019 年、所収)。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察 (4) 信越—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」(『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇』第 9 号、2019 年、所収)。谷沢明「観光パンフレットに見る昭和初期の観光地に関する一考察 (5) 瀬戸内海—昭和初期における観光文化研究—藤井務旧蔵資料を中心に—」(『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第 12 号、2020 年、所収)。

2 藤井務氏は、昭和 13 年 (1938) にジャパン・ツーリスト・ビューローに就職し、昭和 21 年 (1946) の復員後、昭和 54 年 (1979) まで日本交通公社に勤務された方である。日本交通公社の文化課長、調査部次長を経て、公社関連の琉球総合開発株式会社の常務取締役となって沖縄の本土復帰直後の沖縄ハーバービューホテルの運営に当たった。後に創立にかかわった日本ユースホステル協会の理事長に



就任している。同氏は若い時から地理や旅行が好きで、入社するまでにはほぼ全国を旅行し、各地の山などにも精力的に登っており、戦前から、行く先々で観光パンフレットを入手していた。

3 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』昭和5年、p 468～469 間の図版

4 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』大正9年、大正15、昭和5年

5 鉄道院『鉄旅行道案内』大正7年、p 251

6 前掲5、p 237～238

7 前掲3、p 477、「登山案内料噴火口迄往復一円八十銭、火口を経て栃木温泉迄三円」と記載。

8 鉄道省『日本案内記九州篇』昭和10年、p 256～259

9 前掲4、p 76～80

10 本パンフレットに昭和10年10月開業の雲仙観光ホテルの記載がないためそれ以前の発行と推定。

11 五つの航路は、①三角島原線（一日四往復）、②三角本渡直行線（一日三往復）、③三角本渡富岡茂木線（一日一往復）、④三角牛深線（一日二往復）、⑤長崎天草阿久根線（隔日）である。

12 島原湊駅は、大正2年に湊新地駅として開業。

13 加津佐駅は、昭和3年に口之津鉄道の駅として開業。

14 千々石駅は、大正12年に温泉軽便鉄道の駅として開業。

15 小浜駅は、昭和2年に小浜地方鉄道の駅として開業。

16 菊池幽芳「雲仙岳」『日本八景』平凡社、2005年、所収、p 218)

17 前掲5、p 257～258

18 鉄道省『鉄道旅行案内』大正13年、p 208～209

19 前掲3、p 489～502

20 前掲8、p 388～397。十溪は、本耶馬溪、羅漢寺耶馬溪、奥耶馬溪、東耶馬溪、蔦美（津民）耶馬溪、深（新）耶馬溪、麗谷耶馬溪、裏耶馬溪、南耶馬溪、椎屋耶馬溪。

21 昭和2年、久留米―豆田間のバスが運行されると、翌3年には筑後軌道は廃止となった。

22 前掲5、p 224～225

23 青の洞門は「競秀峰の直下を穿鑿した隧道で、自動車、馬車の交通自由である。僧禅海が衆生済度の為三十余年の努力を払ひ漸く成就したもの」と記す。

24 競秀峰は「碧水漫々たる山国川を前にして百数十米の巨巖が半空高く聳へ、山容樹態幻奇を極めて居る」と記す。

25 羅漢寺は「不動坂の登山口は三つの参道の内最も峻峻を極めて居るが、古羅漢一帯の佳景が一眸の裡に集って壯観である。本堂は巖窟を負ふて建てられ古色蒼然として幽寂たる仙境である」と記す。

26 擲筆峰は「山陽が面手亦写も致らざるものありと嘆賞したところである」と記す。

27 一目八景は「紅葉の季節は、石峰林立の間一面の楓が真紅に燃へて、実に美観を呈する」と記す。

28 麗谷は「一目八景付近の入口から溪流に沿うて遡ること三軒余で布目の溪流に達する。此の間溪山の怪奇連続して、殊に布目付近は、溪流美麗にして溪中稀に見る絶景である」と記す。

29 伊福峽は「明光山・三峰岩・城山・鋒岩等の絶景に囲まれた村落」と記す。

30 山田飛猿谿は「岩石の怪奇溪山の幽邃なること、立羽田の景と共に裏耶馬の双壁と称せられ稀に見る絶景である」と記す。

31 立羽田は「山容恰も南画を見る如く一名日暮しの峰と称せらる」と記す。

32 坂の上は「手袋岩・天狗岩等の巨巖削立し、岩石の快奇な点は裏耶馬溪中第一ある」と記す。

33 鶴ヶ峰は「数十米に達する巨岩林立し、前方には遠く飯田高原を望み、眺望雄大である」と記す。

34 昭和13年、鉄道省が、文部省、厚生省、大日本聯合青年団、日本旅行協会（現、日本交通公社）とはかり、全国各地に青年宿泊所を含めた26の青少年徒歩旅行コースを指定し、鉄道運賃を5割引するなどして、青少年徒歩運動を大いに奨励した。（『日本ユースホステル協会史』<http://jyh.shiruman.net/5-yh-jyh-01.htm>）

35 名古屋市博物館『特別展 NIPPON パノラマ大紀行』（展示図録、2014年所収）p 95